ARTS & ROUTES JOURNAL 05

旅するいとなみ

開幕！

2020年11月28日(土)～2021年3月7日(日)
9:30～17:00

展覧会会期

会場 秋田県立近代美術館
〒010-0922 秋田県横手市赤坂字竜ケ沢62-46
TEL.0182-32-8838
FAX.0182-33-8835
（秋田ふるさと村内）

観覧料 一般1,000円（800円）
高校生・大学生500円（400円）
※中学生以下無料／※（）内は20名以上の団体および障害の手帳所持者の料金
※障害者手帳提示の方は半額（介添1名半額）

最終入館 16:30／休館日 12月29日～31日、2月13日～22日

会場アクセス
【鉄道とバス】JR横手駅東口からバス「ふるさと村行き」でふるさと村下車
【自動車】秋田自動車道、横手インターより3分 ※車イス対応の駐車場がございます。ご利用の際は美術館にお電話ください。
【乗用車】秋田新幹線「横手インター入口」下車徒歩10分 ※「横手インター入口」は、秋田行きの乗車のみ。湯沢行きは降車のみです。
【高速バス】高速バス、湯沢・秋田線「横手インター入口」下車徒歩10分 ※「横手インター入口」は、秋田行きの乗車のみ。湯沢行きは降車のみです。

プロジェクト=2019年5月始動
出展作家・プロジェクト=岩井成昭・迎英里子・長坂有希・藤浩志・菅江真澄プロジェクト（石倉敏明・唐澤太輔）・秋田人形道祖神プロジェクト（小松和彦・宮原葉月）・旅する地域考／設営統括=船山哲郎／企画監修=服部浩之
企画運営=NPO法人アーツセンターあきた（岩根裕子・石山律・藤本悠里子・高橋ともみ）
グラフィックデザイン=吉田勝信・梅木駿佑／ウェブコーディング=北村洸

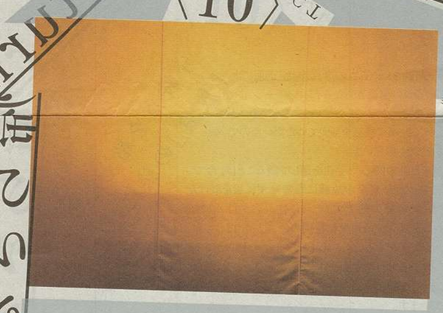
主催=ARTS & ROUTES 展実行委員会（秋田県立近代美術館・AAB秋田朝日放送）・秋田公立美術大学
後援=横手市、横手市教育委員会、秋田魁新報社、河北新報社、朝日新聞秋田総局、毎日新聞秋田支局、読売新聞秋田支局、産経新聞秋田支局、日本経済新聞社秋田支局、横手経済新聞、CNA秋田ケーブルテレビ、エフエム秋田、横手かまくらFM、エフエムゆーとぴあ、FMはなび、秋田県朝日会、東日本旅客鉄道株式会社秋田支社

移行する記憶

「旅と表現」から真っ先に連想するのは1960-70年代のアメリカンロードムービーと言う岩井は、グローバル社会における旅と表現のかたちを資本主義的消費と密接に結びついた自動車による旅へと邁行することから模索。展示室中央にはヴェールに包まれた、1963年にフォード社が製造したマーキュリー・モントレーをモチーフとした黄色い実寸モデルが鎮座する。昨今は二酸化炭素排出量の削減が幅広く議論され、無骨で大型のアメ車は小型化と効率化が進み、均質化が進んでいるが石油を原材料とするスチロール素材を成型し、当時の独特な姿を再現したアメ車を提示することは、現代社会の均質化や画一化した文明批評に対する疑問を投げかけているようでもある。

《to the point of departure》〈01〉 PROJECT

岩井成昭（美術家）



ミクストメディア・インスタレーション／サイズ可変

境界と移動のシステム

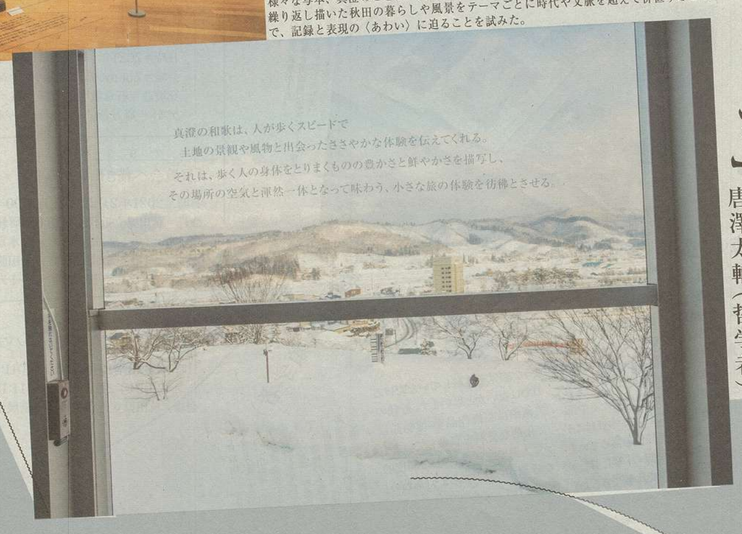
迎英里子（アーティスト）

これまで屠畜、貿易、婚姻など時間の流れとともに展開される社会システムをモチーフとした作品を生み出してきた迎は、ひとやものが国境などの境界を超えて移動する仕組みに着目し、調査と制作を進めた。迎は社会システムを模倣化するために、容易に入手可能な物質を組み合わせることで抽象的な立体をつくり、それらを人が動かすことによってシステムの構造をなぞるようなパフォーマンスをする。本作では作家自身ではなく複数のパフォーマーに行為を委譲することで、仕組みや構造がより客体化されたかたちで提示される。

《菅江真澄プロジェクト》〈00〉 PROJECT

石倉敏明（人類学者）

江戸時代後期の紀行家であり博物学者の菅江真澄の実践を手掛かりとしながら、これまでフィールドワークとリサーチ、あるいは観察と発見から生まれる表現の可能性について考察。人類学者と哲学者を中心に、考古学者、アーティスト、郷土史研究者らが多角的な視点で探求した。それらを踏まえた上で、本展では『菅江真澄遊覧記』の様々な写本、真澄のことば、真澄に迫ったアーティストの作品、そして様々な芸術家が繰り返し描いた秋田の暮らしや風景をテーマごとに時代や文脈を超えて併置することで、記録と表現の〈あわい〉に迫ることを試みた。



秋田人の営み・描かれた秋田

《プロジェクト No.1》〈03〉 PROJECT

唐澤太輔（哲学者）

布、木材、縄、安全ピン、ビニールシート、アルミパイプ、その他／サイズ可変（パフォーマンス）

泥の造型

《泥の造型》〈02〉 PROJECT

小松和彦（郷土史家）
宮原葉月（アートクリエイター）

秋田に数多く残る人形道祖神を探るプロジェクトのふたりは今回、人形道祖神の空白地帯とされる阿仁・森吉地域を取材。菅江真澄が秋田の人形道祖神について記録した最も古い資料である『泥塑天子』を探すルポルタージュ。人形道祖神そのものの造形的な魅力や意味だけでなく、制作者や制作過程に焦点を当てて、地域の人々にとっての意味や位置付けを、制作するコミュニティの人々との関係を紡ぐことで明らかにしていく。本展では、人形道祖神をつくる地域のコミュニティやキーパーソンを丁寧に紹介することで、彼らが調査研究を進める過程を公開。地域における営みと結び付きの過去と現在、未来をつなぐ。

ルポルタージュと人形道祖神画、アクリル絵具、水彩紙、木材、スチレンボード、紙

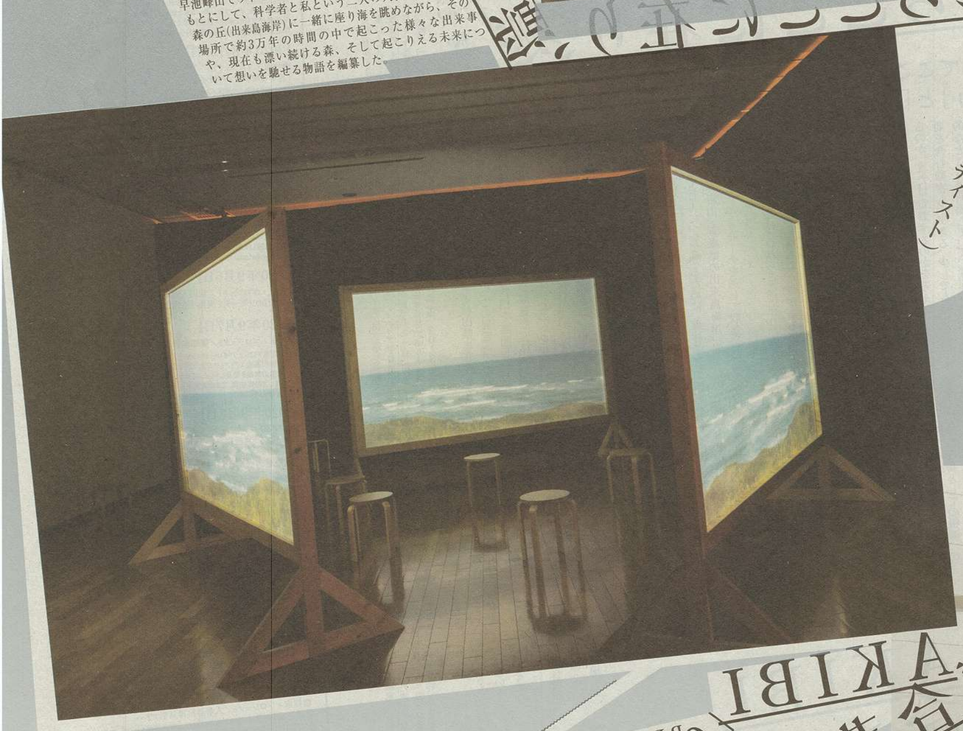
移動とエコロジー

《旅する森で、森を描く》〈04〉 PROJECT

長坂有希（アーティスト）

3チャンネルビデオプロジェクション&音声（日本語・英語）／約8m×12m×5m／20分

青森県出来島海岸にある世界的にも大規模な最終氷期埋没林との遭遇がきっかけとなり、長坂はかつて東北地方を覆っていた森やそこに存在していた生態系、そしてそれらの消滅、移動と行方をさぐるプロジェクトを展開した。かつてあった森の手がかりを得るために、地形学者、古環境学者、植生学者などに取材をし、秋田県の森吉山、青森県の出来島海岸、岩手県の早池峰山でフィールドワークを行った。そのリサーチをもとにして、科学者と私という二人の人物が埋もれた森の丘（出来島海岸）に一緒に座り海を眺めながら、その場所で約3万年の時間の中で起こった様々な出来事や、現在も漂い続ける森、そして起こりえる未来について想いを馳せる物語を編纂した。



記憶と記録の再構成

《Chuta Report》〈05〉 PROJECT

藤浩志（アーティスト）

多様な作品を制作する藤浩志の創造の根源には、収集と分類整理への強い衝動がある。「記憶と記録の再構成」というプロジェクトにおいて藤は、これまでの自身の活動を圧倒的他者の視点に立って観察することを試みた。膨大な資料群を彼自身が選り、そこから抽出したものやことばを再構成する。美術館中央ホールでは二台のリヤカーに1984年から使っている雑記帳や資料が積み上げられ、ねずみの絵のカードが置かれている。QRコードは藤のブログへと誘導し、積み上げられた資料に描かれた記述の一部が鑑賞できる。コロナ禍における非接触型の作品としてリモート環境へと鑑賞者を誘うだけでなく、直接的にものや人と対面できない状況を逆手にとって記録について思考を促す構造。

古民家、資料、ウェブサイト、映像、その他／サイズ可変

《デザインプロジェクト》〈06〉 DESIGN PROJECT

変容してゆく

《旅する地域考 alternative》〈07〉 PROJECT

成果発表展示

旅する地域考

秋田を様々な人と旅をすることで、アーティストや企画者などの表現者や、地域に還元可能な創造的視点をもった運営者や実践者を育てる人材育成プロジェクト。本展では2020年度にオンラインで開催した旅する地域考の参加者が制作した作品を展示し、展示室を出た先のスロープでは旅考アーカイブから選出した写真やテキストによりこれまでの活動を紹介。プロジェクト統括の岩井成昭による「私たちは、あらかじめ芸術の対象としてふるまう「地域」を問い直し、再定義する必要に迫られているのではないか」という問いは、いかに作品へと結実したのか。「地域」という現代芸術の「場（サイト）」として定着した存在の根源的意味を改めて問う。

【JOURNAL 05】
2021年2月発行
発行：秋田公立美術大学
デザイン：吉田勝信・梅木駿佑・嘉本未美
編集：石倉敏明・高橋ともみ・NPO法人アーツセンターあきた
秋田市千秋矢馬町末広川原1-2-3
〒010-1623 秋田市新屋末広川原1-2-3
秋田公立美術大学プロジェクトをはじめ内
Tel：018-888-8137
Mail：info@artscenter-akita.jp
www.artscenter-akita.jp/artsroutes
ARTS & ROUTES JOURNAL 05

ARTS & ROUTES
JOURNAL 05
あわいをたどる旅
開幕！

本紙は、出来事や表現者たちの軌跡をたどる媒体です。
通常は見ることのできない、出来事や時間などかたちを持たないものを展覧会へと描き出す過程を
アーティストや企画者が公開し、思考や出来事を可視化していきます。

◎プロジェクト＝2019年5月始動
◎展覧会＝2020年11月28日（土）～2021年3月7日（日）
◎展覧会会場＝秋田県立近代美術館
秋田県横手市赤坂字富ケ沢62-16（秋田ふるさと村内）／TEL:0182-33-8855
（本館休：12月29日～31日及び、1月13日～22日）
開館時間：9:30～17:00（最終入館16:30）

※01

菅江真澄を軸としたアートの旅路を異なる時間軸で表現する

企画監修・服部浩之（キュレーター）

展覧会の基本的な構造や構成について最初に紹介します。その後、各作家・プロジェクトの皆さんから、それぞれの作品や活動についてお話いただきます。初めに展覧会タイトルについてですが、ARTSとROUTES、つまり芸術と多様な旅路が本展のテーマです。旅と表現、あるいは旅と創造、旅と記録が主題となっています。その起点となるのが、200年以上前に秋田を旅し、膨大な記録を残した菅江真澄です。真澄に関しては歴史学や民俗学、郷土史などの観点からすばらしい研究成果が残されていますが、一方でその活動は現代芸術にも繋がるところがあると考えています。現代アートにおいては、アーティストがある地域に滞在し作品をつくる滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）が定着していますが、真澄が三河国を出て各地に滞在してえた表現が、様々に交わるなかで、旅や移動にまつわる多様な表現を体験していただく展覧会となっています。秋田公立美術大学は新しい芸術領域の創造と同時に、地域の文化や暮らしへの関わりの探求を大切にしており、その態度が本展の軸となりました。

すず創造的・批評的な記録であるならば、真澄が当時の今を捉えた記録活動とも、200年以上の時を超えて接続することができるのではないでしょうか。

また、今回の展覧会場が近代美術館であることにも大きな意味があります。収蔵作品から近代の秋田の風景や人々の暮らしを知り、江戸時代に真澄が歩いた場所をその後の時代に歩いた作家たちが眺め捉えたものに出合うことができます。各展示室には現代のアーティストの作品を展開しつつ、各室のガラスケースには真澄の図絵に加え、近世、近代の美術作品を配置しました。秋田の土地や人の営みを異なる時代に捉えた滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）が定着していますが、真澄が三河国を出て各地に滞在してえた表現が、様々に交わるなかで、旅や移動にまつわる多様な表現を体験していただく展覧会となっています。秋田公立美術大学は新しい芸術領域の創造と同時に、地域の文化や暮らしへの関わりの探求を大切にしており、その態度が本展の軸となりました。

菅江真澄の旅と記録を起点に、近世・近代、そして現代の美術のあわいをたどる

江戸時代後期に活動した紀行家で博物学者の菅江真澄は、三河国に生まれながらも、東北各地をくまなく歩き、秋田にも長く滞在しました。様々な土地でフィールドワークを行い、そこにある文化習俗、風土、宗教や儀式、生活の様子などを図絵と言葉、ときに詩なども詠み、丹念に残していきました。真澄のこの活動は、地域の様子や歴史を伝える記録として価値があるだけでなく、表現としても高く評価されるべきものです。また、約200年前に真澄が残した記録をたどり、その表現としての価値を再考することは、写真や映像などの複製技術が発達し、それらによる記録が芸術表現においても大きな地位を占めるようになった現在においては重要なことでしょう。

本展は、様々な媒体により表現される芸術が、多様な領域のあわいにあるものということを改めて意識した上で、「旅と表現」をひとつの主題とするものです。秋田公立美術大学はフィールドワークやリサーチを軸としたプロジェクト型のアート活動を多数展開し、新しい芸術領域の創造を探求しています。「ARTS & ROUTES－あわいをたどる旅－」は、真澄の描いた図絵を手掛かりに真澄をたどるプロジェクトを起点とし、現代のアーティストたちが制作した作品に加え、美術館や博物館の収蔵作品・資料なども交え、出来事や時間などかたちをもたないものを過去から現在へと至る多様な表現の混交により展覧会へと描き出す試みです。

服部浩之（キュレーター）

秋田県立博物館蔵

菅江真澄（1754－1829）

江戸時代後期の紀行家、博物学者。三河国（愛知県東部）に生まれ、本草学・医学、漢学などを修めた後、30歳で故郷を旅立ち信州から東北、北海道を巡歴。48歳で再び秋田入りして史、地理、文学、考古など多岐にわたる内容を日記や地誌、随筆として絵と文章で記録した。

菅江真澄〈00〉PROJECT

多彩な要素が重奏的に重なり合いながら表現されていく

唐澤太輔（哲学者）

菅江真澄プロジェクトでは真澄に関する文献調査とともに、真澄に関心をもつアーティストや研究者をお招きしてトークやディスカッションをおこなう「菅江真澄をたどる勉強会」※03を数回にわたって開催してきました。その中で、哲学や人類学、歴史学、考古学そしてアートなど、様々な視座から真澄の表現を捉え直してきました。真澄は、ナマコガベや縄文土器について図絵を伴う最古の記録を残した人でもあります。

それ以外にも、調査や勉強会から浮き彫りにされた彼の特徴はいくつかあります。例えば、人間よりもはるかに長い生命を持つ木々に対して、敬意とも言える特別な感情を持っていたこと。他には、真澄は博物学者とも呼ばれますが、珍しいモノをほとんど手元に置くことはせず、モノがもっている場所性をとても大事にしたことなどがあげられます。真澄の図絵や文章、和歌には、このような彼の独特かつ多彩な要素が、重奏的に交わり合いながら表現されています。詳細は、会場内のキャプションや来場特典の小冊子※04をぜひお読みいただければと思います。

みかべのよろい［1805年 冊子（中本）］県庁本・図書館本／秋田県立博物館蔵

江戸時代後期の真澄の真筆冊子。三河国（愛知県）に生まれ、秋田を旅し、膨大な記録を残した菅江真澄。それを普及するために写した冊子本。3冊目の表現の美様さに写した冊子本。それを普及するために写した冊子本。3冊目の表現の美様さに写した冊子本。

唐澤太輔（哲学者）

肯定的で明るい真澄の和歌

真澄は、様々な地域を歩いていくなかで、非常に多くの和歌を残しています。しかし、かつて柳田國男が「真澄翁の歌には殆と一首として名歌がありません」と述べて以降、現在に至るまで、真澄の和歌の研究は十分になされてこなかった経緯があります。真澄にとって和歌は物事を内側から深く知る方法であったとともに、外部者であった彼が地域のコミュニティーに入るための重要な手段でもありました。特徴としては、決して技巧的なものではありませんが、肯定的で明るく、元気が湧くような和歌が多いのではないかと思います。真澄の表現において、図絵とともに和歌は欠かすことはできません。今回は、これからまだまだ研究の余地のある真澄の和歌にも焦点を当てたいと思い、第1室で1首、回廊で4首の和歌を紹介しています。

唐澤太輔（哲学者）／1978年、兵庫県神戸市生まれ。2000年3月、慶応義塾大学文学部卒業。2012年7月、早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程修了（博士（哲学））。日本学術振興会特別研究員（DC）、哲学・倫理学、早稲田大学社会科学総合学術院助教などを経て、現職。人類が絵を描き始めた頃、宗教・文化の根源的な在り方を探求する。著書に『南方熊楠の見た夢－パサージュにひろがる「南方熊楠」の可能性の極限－』（中公新書）など。秋田公立美術大学大学院准教授。

石倉敏明（人類学者）

博物館と美術館を行ったり来たりするような体験を

企画監修を務めた服部浩之さんは、菅江真澄と同じ三河国（愛知県）出身のキュレーターです。また、真澄が尊敬していた仏師・円空や、真澄の没後に北東北を旅した蒔田山人は共に美濃国（岐阜県）の人で、いずれも西日本と東日本の「あわい」に当たる中部地方に生まれ、東北を旅しました。本展はこうして時間・空間を超えた連続性を秘めています。本展はまた、真澄の記録の「写し」について、複数のバリエーションを比較できるようにと、博物館と美術館を行ったり来たりするような感覚を体験していただけるのではないかと思います。近代の美術館は芸術作品を、博物館は文化的な資料を収蔵していますが、人間の生活はそうした制度的な分類から漏れてしまう「あわい」で営まれているものです。それを実感しながら、もう一度新しい目で「表現」を見直していただけるのではないかなと思っています。

石倉敏明／1974年東京生まれ。明治大学野生の科学研究所研究員。信仰・山の神・芸術・先住民文化・民俗神話学・生態人類学・文学・芸術表現の可能性を探究する。『人と動物の人類学』（共著、春風社）、『野生の思考』（共著、亜紀書房）、『人と動物の人類学』（共著、春風社）、『ユリイカ 現代人類学』（共著、青土社）、『ロゴ・ディアローグ』（共著、ぎょうせい）、『附属神話集』（共著、春風社）、『アイ・ライク・リサ物語』（高木正勝作曲、公立美術大学准教授）。

石倉敏明（人類学者）

移動が困難な時代にこそ

展覧会場を歩いてきて、そろそろ疲れが出る頃。この回廊では、真澄が秋田を歩いたときに詠んだ和歌を鑑賞できます。窓から外の風景を見渡すことができますので、少しゆったりと展示を「体験化」してみてください。菅江真澄という人は、人が歩くスピードで観察し、いろいろなことを考え、よく立ち止まった人でもあります。そして、真澄が旅した時代は、伝染病や飢饉、地震や噴火などが頻発した時期でもありました。「コロナ禍」の現在と同様に災害が多く、必ずしも移動に適した時代ではなかったということも、思い出していただけたら。菅江真澄の日記や地誌には、そうした厳しい現実も、美しい景観や風習の記録も混在しています。それらを通じて、後世の人たちが秋田をはじめ北東北、北海道という「北の世界」を知り、また柳田國男や宮本常一といった後継者たちが、日本民俗学という感性と知性に訴える創造的な学問を創造しました。今後、私たちは何を観察し、どんな表現を残していくのか。ゆったりとした足取りで、時間と空間のあわいをたどりながら、展覧会全体を振り返っていただけると嬉しいです。

菅江真澄プロジェクト《幻の泥塑人形》を探して〈06〉PROJECT

宮原葉月（アートクリエイター）

謎かけをして、リサーチを続けることで見えてきた答えとは

現在は古い地帯とされている地域にも、人形道祖神という言葉があったと思います。かつてサイクルロードレースが通過するたびに、こういった民間伝承の人形が数多くあることを記録したのが菅江真澄です。ガラスケース内には真澄が記録した人形道祖神のうち、古い写真が、現在の秋田県内の道祖神と史研究を行う著者が撮影した道祖神の写真と共に並んでいます。また、現在の秋田県内の道祖神と、菅江真澄が描き残した図絵を比べたものが並び、その頭部がニット帽にあか掛けのショウキサイズに似ていることに気づきました。柳河村とニット帽は約40キロ離れていて、その間の地域は人形道祖神がもっと祀られていたのではないかとリサーチしたポルタージュを、原語をオマージュしてご覧いただいています。現在の史料と200年前の図絵を見比べることで、何が変わっていったのかを考えていただいています。

宮原葉月／神奈川県横浜市生まれ、上智大学外国語学部イタリア・ラテン語学科卒業。2008年をイリイスフレーターとして活動開始。国内外の展示、現場をテーマとした制作を続ける。『ポルタ』（ポルタ・ポルタ）の制作、『ピンクとグレー』（加藤シゲアキ著、KADOKAWA）『服を買うから、捨てるから』（地味いく著、宝島社）の装幡など。2017年より秋田市在住。

菅江真澄の記録をもとに時空を超えた追跡へ

人形道祖神という言葉はなかなか聞慣れない言葉かと思います。かつて柳田國男が「放浪」の旅にむけて、菅江真澄の足跡を追ってみました。

展覧会のつくり方に着目して発表してきた。JOURNAL※19（本紙）のテーマは、展覧会や作品をつくる過程を公開することのない、展覧会や作品をつくる過程を公開するために、グラフィックデザイナーが独特の関わり方をして制作してきました。リサーチをもとに変容していくデザインもまた展覧会を特徴づけ、踊るように、蠢くような文字組は会場デザインにも、看板制作や来場者特典のトラベルガイドなど、デザイナーの関わり方もひとつのプロジェクトとして展開しました。

全体ディレクション・グラフィックデザイン＝吉田勝信（デザイナー・吉勝制作所）、梅木脇佑（アートディレクター・デザイナー・UMEKI DESIGN STUDIO）
ウェブコーディング＝北村 茂（ウェブデザイナー・フロントエンジニア・DESIGN STUDIO K）
看板制作＝荒達宏（荒大工）、大江よう（テキスタイルデザイナー・text）

菅江真澄プロジェクト《われらここに在り、遥うかなる地域》〈04〉PROJECT

かつてここにあった森の「移動」と「定着」を通して、人間のこと、人生のリアリティを考える

石倉敏明（人類学者）

旅の経験を経て、地域はいかなる輪郭を描き出すのか

『旅する地域学』※05は秋田公立美術大学の岩井成順先生を中心に2018年から続くプロジェクトです。企画を運営していくマネージメント業務に携わる人が有一つ場を秋田につくりたいという思いと、地域と関わってクリエーションを起こしていく秋美のスタイルを主軸として3年間、これまで5回ほどおこなってきました。人材育成プログラムといった様々なスキルを学んでいくイメージがあると思います。しかし、私たちは秋田県内を縦断したり、普段い地域に滞在したりしながら現地の方々と国内外からお招きしたゲストの方々、会国から公募した参加者たちが、様々な媒体でプロジェクトを通して、地域おこし魅力探こしをしていくメンバーが一緒に過ごす移動滞在型のアークショップを開くことが難しくなり、自分の住んでいる地域、活動している地域を現場としてオンラインで秋田と結んでワークショップをおこなう試みをしました。今年は新型コロナウイルスの影響で在宅勤務の人たちとの繋がりを見直し、「10のタネ」をキットとして提供しました。旅に記録と表現を加え、様々なものを詰めこんだ「10のタネ」※06と呼ばれる道具を用いて、ものづくりを通じてコミュニケーションを図ることを試みました。参加者たちは、様々な表現を通じて、地域の人たちとの関係を結び直すことになりました。今回、参加者たちが、様々な表現を通じて、地域の人たちとの関係を結び直すことになりました。今回、参加者たちが、様々な表現を通じて、地域の人たちとの関係を結び直すことになりました。それぞれが自分で活動を展開していくためのヒントとなるような、ものづくりのかたちを、ワークショップを通じてお伝えし